

夢の数

書きとめていた百二十五の夢が
今朝がた百二十六になりました

夜中でも明け方でもうたた寝の間でも
必ず残していたそのメモは
あなたとの朧げな幻の思い出
それを大事に書きとめるのが
いつしか私の習慣となりました

二百でも三百でも
書きとめるつもりでいるけれど
日が経つにつれその間隔は
だんだんと長くなりつつあります

時が私の悲しみの記憶を
薄めながら立ち去っていく
人間の忘却という名の防衛機能が
自然とそのような働いて
傷が癒える安堵と寂しさの狭間で

まだ温かい足跡をなぞるように
掴めない袖に手を伸ばすように
あなたを残してみるのです